

ウィナーワルツを習う

ピアノを勉強している人なら、J・S・バッハの組曲のうちの1曲ぐらいは弾いたことがあるだろう。パルティータ、フランス組曲、イギリス組曲…など種類はたくさんあって、選ぶには困らない。

それぞれ数ページずつの短い曲が集められているが、正直にぶちまけた話「無味乾燥ておもしろくない！」と感じた人も、少なくともに違いない。

ただ漫然と指の練習用として無表情に弾くだけでは面白くないのは当たり前。でもその時、もしかして横で鉛筆をにぎりしめて威厳ありげな顔をしている先生に「これは踊りの曲なのよ、だからもっと生きいきと弾いてちょうだいッ！」などと言われた記憶はないかな？

確かにこれらは全部ダンス音楽なのだ。だいたい音楽のリズムには踊りの動きと密接な連繋を持つものが多い。アルマンド、クワラント、メヌエット、ガヴォット…、

こうしたバロック音楽に見受けられる表題ばかりでなく、ポルカもマズルカもポロネーズもみんなダンスである。そしてもちろんワルツも。

これらのうち多くのリズムはもう古くさすぎて一般には踊られない。音楽だけは芸術作品として演奏されているが、その演奏者自身も、そしてそれを教える立場にある教師達も、果たしてそのダンスがいかなるステップの踊りであるか、というのは全く知らない場合がほとんどである。

これは本場ヨーロッパでも同様だ。メヌエットぐらいはオペラやバレエのシーンで見られる機会も

華やかな舞台を夢みて



あるが、それ以外のダンスは特別なセミナーなどで、その道の専門家について教わるしかない。

それはさておき、ウィーンではダンススクールが盛んである。

ソシアルダンスというと、日本ではどうもジジむさい斜陽のイメージがあつてパツとしないが、ウィーンではこういった学校に通うのがひとつのプライドでもある。だいたい夕方から夜にかけて催される講習に集まるのはティーンエイジャーばかり。日本でのイメージからはほど遠い。

今日はウィーンに数あるダンス学校の中でもそのモダンなイメージで有名な「ダンススクール・スターネット」を紹介しよう。この校長先生であるヴォルフガング・スターネットさんは、ソフトでダンディーなやさしい先生。レッスンは毎回この先生が実際に手を取り足を取り親切に教えてくれる。

スターネット先生は以前はウィーンで一番歴史のあるダンススクールの老舗「エルマイヤー」で13年間もインストラクターを勤めたベテランである。でも本業は工業用機械を開発する技師だったそう。本来は副業だったダンスが高じてダンス教師としての国家試験を受け、自分のスクールを開

おジョウ様とならレッスンも楽しい



くに至る。

オーストリア全体で70校ぐらいもあるダンススクールは、何もダンスばかりを習うところではない。ここが他の国ではみられない重要なポイントだ。

講習の第1日目はまず礼儀作法

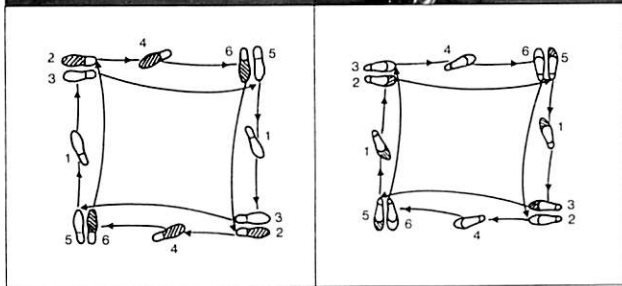
の躰から始まる。公の場での挨拶や自己紹介の仕方、誰かを紹介する時の作法からはじまって実際にダンスのパートナーを依頼する時の礼儀……色々な場面での対応の仕方を教わる。これは特に舞踏会の時ばかりに限らぬ一般の礼儀作

法でもあり、生徒達が将来実社会で必要とする事ばかりである。名門のダンススクールは即ち花嫁・花婿学校と言ってもおかしくない。それだけにここに集まってくる生徒は、どちらかというとな流家庭の子女が多い。

こちら一般的な回転の小市民ターン(ナチュラールターン)



これが噂の左回転、ノブルな方のターン(バースターン)



このスクールで最も一般的な初心者コースは週1回90分ずつ36回通うもの。もちろん速成コースもあるが、これで一通りのステップが覚えられる。伝統的なステップばかりではなく、タンゴやサンバ、そればかりかパーティーやディスコで踊れるようなチャカチャカしたのも教えてもらえる。パートナーとペアで来る必要はなく、毎回違う相手と踊れるのもメリツトのひとつ。恋の芽生える可能性は充分すぎる程である。

数あるステップの中でも一番のかなめはウインナーワルツだ。これはカリキュラムの中でも特別の比重をもって練習される。

「ウインでは左回りのウインナーワルツをエレガントに踊れるのが上流社会人としてのたしなみである」とまで言えるこの大切なダンスのステップを分解してみたい。トライしてみよう。でも転ばないようにネ!

「足がどうしてもからまっちゃうわ。長すぎるせいかしら?」という人は、一般人用右回りステップをマスターしよう。ワインを飲んであとでクルクルと回っていると、酔いがまわって足元がおぼつかなくなる事があるので要注意。なおワルツを30分踊ると171カロリー消費できるそうだ。